News Letter
発行　2011年6月

遊文通信 VOL.09

「第2回MUDグランプリ」2部門受賞の栄誉

受賞者全員での記念撮影

2011年5月14日、大阪府印刷工業組合主催の「第2回メディア・ユニバーサルデザインコンペティションMUDグランプリ」表彰式において、昨年に引き続き遊文舎デザイナーの作品が2部門で表彰されました。

昨年の審査員特別賞『こんなOSAKAがええねん鉄道デザインプロジェクト』は、3人グループでの受賞でしたが、今回は個人エントリーでの受賞です。

審査委員長の金沢美術工芸大学の寺井剛敏教授は、「第2回の今回は昨年の2倍近い約90点の応募があったが、昨年を上回るクオリティの高い作品が多いことを感じた」と作品の総評を述べられ、遊文舎の2作品についても高い評価を頂きました。

2年連続の受賞は、遊文舎にとって名誉なことであり、社員一同の喜びもひとしおですが、これに慢心せずに遊文舎デザイナー一同、さらなる精進を重ね、お客様に満足して頂ける商品をこれからもお届けしたいとはりきっています。

大阪府印刷工業組合賞

松尾 由華

『キット、たしかな安心に。救急医療情報キット』

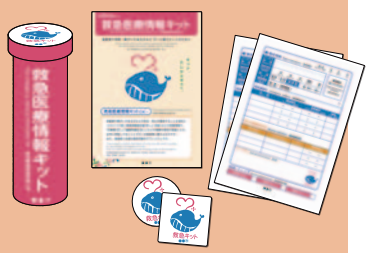
展示された受賞作品と

高齢者や持病・障がいのある方々が、かかりつけ医や服薬内容、緊急連絡先など救急時に必要な情報を収めた「救急医療情報キット」を冷蔵庫に保管しておく取り組みが、各市町村で少しずつ広がっています。

そこで、上記の方だけではなく、一人暮らしの方、海外から日本に来られている方にとっても、安心して生活ができるような「キット」にしたいと思いました。

ユニバーサルデザインを活用して、より使いやすく、見やすく、分かりやすい、やさしいキットを提案しました。高齢者から子どもまで、家族みんなで興味と理解を持っていただき、一緒に取り組んでいけるキットにしたかったので、ロゴマークとキット全体のキャラクターを動物にして、親しみのある雰囲気作りを心がけました。

今回の受賞で、より多くの人に実用化していただける機会が増えることを願って、これからも色々な事を吸収して成長していきたいと思っています。



審査員特別賞

米田 達生

『ユニバーサル点字ブロック』

右が展示された受賞作品

第2回MUDグランプリにおいて、審査員特別賞をいただきました。

視覚障がい者誘導用ブロック（通称:点字ブロック）が、景観を損ねるという理由で床面のタイルなどと模様や色に差をつけず、弱視の方や高齢者にとって非常に見えにくいものになっているという現状があります。

ブロックに丸とラインを加え、色もユニバーサル対応にして視認しやすく、よりわかりやすくデザインしました。より多くの人が点字ブロックの存在や意義を理解し、視覚障がい者が安心して外出できるやさしいまちづくりの一助となればと思い、提案しました。

日ごろ見落としがちな床材を提案した着眼点に評価をいただき、自分としても発想や考え方に重点を置いたところだったので、非常に嬉しかったです。

この経験を糧にデザインの美しさはもとより発想・アイデアも鍛え、仕事に活かせたらと思います。

twitter
最短3時間で印刷！すぐスル.com
@sugusurucom
http://twitter.com/sugusurucom

栄光の架け橋 第9回

第9回は関西大学出版部さんにお伺いし、熊次長にお話をお聞きしました。

── 関西大学出版部についてお聞かせください

関西大学出版部は、第二次世界大戦後の昭和22年（1947）6月に設立され、すでに64年の歴史を有しています。長年にわたって関西大学の教員の研究成果や教科書などを刊行してきました。年間の刊行点数は約20点です。

現在、大学には教育、研究に加え、社会貢献ということが強く求められています。優れた研究成果を出版するのは、大学が社会に貢献する具体的な方法の一つと言えます。現今の厳しい出版状況のもと、関西大学出版部が学術出版の灯をともし続けているのは、こうした考えに基づいているからです。

ただ最近は、最先端の学術成果だけでなく、広く一般の方に受け入れられるような教養書の発行にも力を入れ、親しみやすい大学出版部をめざしています。

── 一般の書店でも販売されているのでしょうか

もちろんです。全国どの書店からでもお買い求めいただけます。書店の店頭にない場合は、注文によりお取り寄せいただくか、関西大学出版部のホームページから直接お申し込みいただくことも可能です。即日、代金引換にてお届けさせていただきます。

── 遊文舎の印象はいかがですか

ひと言で言えば「安い。速い。きれい」でしょう。対応が速いのは、製作時間に限りのある出版社にとってはありがたいことです。

関西大学出版部のみなさんと西澤（前列右）

また、カバーをはじめとしたデザイン力が優れているのも、遊文舎さんの特徴ですね。美しく、印象的なカバーは販売アップに直結します。

そして、安い。「安かろう、悪かろう」では、お客さまの信頼を得ることはできません。遊文舎さんは、これらの相反する条件を見事にクリアーしています。常に最先端の技術を取り入れ、改革に取り組む姿勢が、こうしたところにも現れているのでしょう。

── 今後遊文舎に期待することは

関西大学出版部のホームページは、遊文舎さんにお手伝いいただきました。印刷だけでなく、デジタルに対応できるのが遊文舎さんの強みの一つだと思っています。すでに押し寄せている「電子書籍」への対応についても、遊文舎さんの的確なアドバイスと強力なサポートを期待しています。

（聞き手：西澤）

だーくんの 趣味を語れば！ Level.9

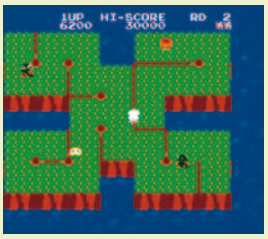
僕、『だーくん』の趣味はゲーム。
というわけで、今までに夢中になったゲームの思い出なんかをなんとはなしに書いていこうと思います。

梅雨入りですね。
雨の中出かけるのが、億劫なときもあるでしょう。皆さん、濡れるのはいやでしょう。そんなときは、ゲームをしましょう。
そんなわけで、このゲーム。
「ディグダグⅡ」

これまた、ナムコの代表作に近いですね。地面を削りながら、敵を水の中に落としていくゲームです。一気に敵を倒せたときの快感に酔いしれるのもいいでしょう。パズル的快感に陥るのもいいでしょう。敵が一匹だけ残ると、その敵が自ら水の中に落ちていくさまを見て、この世の無常を感じるのもいいでしょう。

そんな…自ら水の中に…

と、子どもながらにショックを受けたものです。



印刷こぼれ話

Part.6

印刷営業〇〇な話

**おなじみ我が印刷会社の営業マンが
今日も街中を走り回ります。
その途中で出会った〇〇な話をご紹介します。
今回はT君の登場です。**

営業マンT君は、営業車である軽自動車に乗って主に大阪市内を駆け巡ります。
お得意先はもちろん、時には協力会社に説明や手配するために訪問することもあります。

朝からあちこちのお得意先を訪問して疲れ果てたT君はその日の最後にシールを専門とする協力会社Sに向かった。

会社の近くではあるが、原稿を持っていつもの軽自動車で訪れた。
交通量が多く、なかなか停めることは難しいが、「軽ならちょうど置けるスペースがある」と思い、S会社の前を歩道をまたぐように停めようとスピードを落とし徐行した時だった。

T君の車をにらむようにこちらを見ている年配の男性が目に入った。
「何だ、このオヤジ」と気付いたTは、その男性をにらみ返し大人気ない数秒間のにらみ合いが続いた。

Tは思った、このオヤジにすれば「どこに停めてるんや、何者やねん」と思っているはず。「俺はココに用事があるねん、にらまれる覚えはない」と強い気持ちで原稿を手にし、車を停めて車外に出た。

Tはまたしても思った「あのオヤジ、警察に通報しないやろな～、ひょとして近所に住んでるかもしれないし…」と若干の不安を抱きながらS会社のトビラを押した。

T「こんにちわ、遊文舎です。」
S会社「いらっしゃいませ」と声のする方を見るとさっきのオヤジの姿が見えてこちらに寄って来た。
T「あの～お話したいんですが、いいですか？」と言いながら自分の名刺を出した。
オヤジ「どうぞ、どうぞ。こちらへ」と言われ、交わした名刺はS会社の社長の名前があった。

T「え～社長かい、知らんやん」と心の中で呟いた。
その後の打ち合せは、何もなかったかのようにその原稿についてのみの大人？のトークで終始した。

商談を終え、車に乗り込んだTは「なんやねん、社長かい。そんならにらみつけるなよな～、俺より何歳も年上やろ」と車内で叫びながら会社へ車を走らせた。

今月の一押し本

みなさんこんにちは！新旧問わず、私キパノスケのまったくの主観に基づき、お勧め本をどんどん紹介させていただきます。ご感想などお聞かせいただければ幸いです。

垣根　涼介
『借金取りの王子』 新潮社 ¥1,575

今回はビジネス社会に生きる人ならきっと感動や共感を覚えるであろう1冊です。
この本は「君たちに明日はない」シリーズの第2弾にあたります。

企業のリストラ代行のスペシャリストである主人公の飄々とした活躍と企業社会の悲哀、人間模様が巧みに描かれた第一作も面白かったですが、第2作の「借金取りの王子」は逆になんらかの事情でリストラ対象者になった人たち（本人はみな優秀で落ち度はない）の視点で物語が進行します。

5編のオムニバスになっており、それぞれの業界の裏事情も興味深く描かれています。

なかでも表題作「借金取りの王子」は泣かせる話なのでご一読ください。
一流大学を出て消費者金融に就職した青年が見た高収入と引き換えの苛烈な業界の裏事情。
数字が全ての世界で心が通い合った優秀な女性店長との哀しい愛と最後の心温まるハッピーエンド。お勧めですよ！

（キパノスケ）

真っ盛りの
スタッフシリーズ

おのちゃんがイク!! VOL.9

伝説の営業マン おのちゃん（第1話の6）

おなじみの「おのちゃん」、伝説を生み出した彼を小説風に紹介します。
（この小説はフィクションです）

「これはどういうことなんですか」
小野は野田原に尋ねた。
「そう、ですねぇ。確かにだれもいませんね…。」
「今日は火曜日ですよね」
「そう、ですねぇ。火曜日？ですね…。はい。」
野田原自身も分けがわからなかった。今日は設立記念日か何か…？いや、そんなのは入社して以来一度も聞いたことがない。でも新入社員の人と2人で平日の朝、だれもいない事務所にいる……。ええ～～ありえないでしょう!!。
野田原はかなりタイミングをずらして焦り始めた。
頭の中は真っ白になりながらタイムカードを押して席についた。
「ちょっとこれはどういうことなんですか」小野はそう言いながら落胆した表情をうかべ事務所内をうろつきながらさらに言葉を続けた。
「僕もこれまでいろんな会社で働いた経験がありますが、こんなの初めてです。平日に社員が全員出社していない…、で、何も知らない社員が一人で出勤する、新入社員の僕も何も聞いていない…、何なんですかこれは…」小野は呆れかえっていた。
「そう、ですねぇ。」
「そうですねじゃないでしょ！」ついに小野は癇癪をおこし、さらに「そうですね、そうですね、って笑っていいとものテレフォンショッキングじゃないんですよ!!」と、別にいらない言葉を全力で付け足した。
「ああ、あれね、イラっときますね、はは」野田原は会話を広げようとした。
「もう、ほんとに、何なんですかこの会社は…、もうどうしようかなほんまに…」
小野はさらに怒ってしまった。野田原は会話を広げることができなかったことを悔やんでいた。もっとタモリっぽく何かやればまた展開が違ったかも…。
「まあ、そのうち誰か来るんじゃないですかねぇ、待つしかないですよ」
野田原は開き直ったようにそう言った。
「このまま待っとけというんですか！このまま誰も来なかったらどうするんですか！」
小野が叫んだ瞬間、事務所の電話の音が鳴り響いた。時間は8時55分。野田原がとっさに受話器をとった。
「はい、翔文館印刷です」
「もしも…し、ごっほっほ！、ごっほっほっほ!! もし…ゲっほっほ、おはよう…ごさ…います。く、くうぉんどうです、ゲっほっほっほぉぉぉ…。」
「あ、おはようございます…どうしたんですか、近藤さん」
「ちょっ、ちょっと、ゲッっほ、あ、朝から急に、は、腹が痛くなってゲッっほっほ」
「風邪じゃなくてですか…」
「へ！……、い、いや、そ、そんな感じでも、あ、でも風邪っていえば風邪かな、ゲっほっほぉ、ぐっほっほ…」
「腹が痛いのにそんなに咳き込むんすか、なんかやばいですよ」
「いや、や、やっぱり腹は痛くな、ないかなぁ～、風邪？かなぁ、みたいな」
「何なんすかそれ…」
「分かりやすくいうと、こ、恋の病みたいな、こう、なんて言うのかこう胸の奥が…」
「もういいっすよ　分かりにくいっすよ」
「げっほっほぉ～か～ペッ!!」
「休むんですか」
「はい」
「はじめから言ってくださいよもう、こっちは今えらいことになってんすから」
「え、うそ、どうしたん、どうしたん」
「何すか、その休みを受理された安堵感バリバリの元気さは」
「ええから何があったんや、言うてみ」
野田原は状況をすべて近藤に説明した。
「う～ん、それは大変だ」
「ってことは近藤さんも何も知らないんすか？昨日は会社で何かあったんですか」
「いや、俺も昨日から腹が痛くて休んでいたからわからんな」
「今朝から急に腹が痛くなったって言ってたじゃないすか…」
「ゲっほっほ、ぐぉっほぉ～」
「もういいって、しかも腹痛いのに何なんですかそのわざとらしい咳きは！」
「と、とりあえず、そういうことで…グッドラック!!」
「意味わからんし!!」
野田原は電話を切った。小野はこの状況に完全に諦めたように
「もういいですわ、辞めさせてもらいますわ…野田原さん悪いけど会社に言っておいて下さい…もう分けがわかんないですわ、……はぁあ。」
それだけ言って事務所を出て行った。
直後、始業のチャイムと同時にまた電話が鳴った。
事務所を出て行く小野に気をとられていた野田原はあわてて受話器をとった。
「はい、翔文館印刷です。」　（つづく）

次回予告　次回「おのちゃんがイクVOL10」は“伝説の営業マンおのちゃん 第1話の7”（予定）※内容はやむを得ず変更になる場合がございます。ご了承ください。

遊文舎がお届けする超特急印刷サービス
最短3時間で印刷！
すぐスール.com
すぐスール　検索
http://www.yubun.co.jp/
お問い合わせ・ご相談はこちら
電話 0120-132394（いんさつすぐよ）
E-mail sugusu-ru@yubun.co.jp
受付時間
平日9：00～18：00（土・日・祝日、年末年始を除く）

編集後記

震災の爪跡はまだまだ残ったままですが、もどかしさが募る一方で復興支援として有名人が訪れた時の被災者の笑顔は、心に潤いを覚えます。
一日も早い復旧復興を願うばかりです。
（Dandy）